

図書紹介

桑原 隆編

『新しい時代のリテラシー教育』

石田 喜美*

1. はじめに

リテラシーとは何か。近年、さまざまな場でこの問いを耳にするようになった。この背景には「メディア・リテラシー」「コンピュータ・リテラシー」から、「スピリチュアル・リテラシー」まで、さまざまな場で「リテラシー」という語が比喩的に用いられるようになった現状がある。ここで「リテラシー」という語によって比喩的に示されているのは、これまでの知識・教養に代わる、いわば「新たな知識」「新たな教養」である。が、「リテラシー」が「新たな知識」「新たな教養」を示す用語であるならば、そこで示されている「新たな知識」「新たな教養」とはいったい何か。冒頭に示した「リテラシーとは何か」という問いは、まさに、これからの時代に必要な「新たな知識」「新たな教養」とは何かを知らうとする、人々の思いと無関係ではあるまい。

「リテラシーとは何か」という問いに、字義的に答えるのは難しいことではない。“literacy”という言葉を手元の辞書で引けば、すぐに、その辞書的な意味を知ることができる。通常、その第一義としては、「読み書き能力」「教養があること」という定義が示される。加えて、「社会的に必要となる基本的能力」「知識、能力、リテラシー」等の定義が示されることもある。しかし、これら辞書的な定義はすぐに、「では『社会的に必要となる基本的能力』とは?」「『知識』とは何か?」「『能力』とは何か?」といった問いを引き起し、結局は、言葉同士の相互参照循環に巻き込まれてしまう。

本書は、「リテラシーとは何か」という問いに対して、国語科教育の立場から答えようとするものである。国語科教育は、長い間、伝統的なリテラシー教育に深く関わってきた。また、近年の「リテラシー」という語をめぐる混乱した状況の中で、現在、新たなリテラシー教育のありかたを探求している。この意味で、「リ

*日本学術振興会特別研究員

テラシーとは何か」という問いは、現在の国語科教育における本質的な問いであるといえる。本書のタイトル『新しい時代のリテラシー教育』は、このような現状認識に基づくものであろう。また、本書は編著者である桑原隆氏の退職記念論集として編集・発行されたものであり、本書には、大学院生として編著者に直接指導を受けた関係者による論考31編が収められている。これらの論考には、国語科教育研究に携わる著者が、「リテラシーとは何か」という問いに対し、それぞれの立場から取り組んだ成果を見ることができる。

2. 「不易流行」

本書の編著者・桑原隆氏は、現代をグローバル社会と捉え、グローバル社会の特徴を二点挙げる。その二点とは、(1)自由競争による経済と(2)情報社会である。現代社会に対する編著者のこの認識は、本書全体の特徴を暗に示しているように思われる。その特徴とは、「不易流行」という言葉で示すことができよう。「不易流行」とは蕉風俳諧における重要な理念の一つである。その理念には次のような意味がある。ひとつは、蕉風俳諧においては「不易」（永遠に変わらないもの）と「流行」（時に応じて変化するもの）という対立する内容の教えがあるが、これらは根本においてひとつのものであるということ。そして、「不易を知らざれば基立ちがたく、流行を知らざれば風新たならず」（『去来抄』）、すなわち、「永遠に変わらない本質を知らなければ基礎が確立せず、逆に、時代の変化を知らなければ新たな進展がない」ということである。

「不易流行」という言葉は、教育に関する議論の場で持ち出されることの多い概念である。事実、インターネット検索サイト Google で「教育」「不易流行」を検索すると、29万4千件の検索結果が示される。「不易流行」のみで検索した結果表示されるサイト数は59万4千件であるから、「不易流行」という言葉を含むサイトの半数近くが、同じサイト上で「教育」という言葉を用いているという計算になる。もちろんこれらすべてのサイトが教育についての議論をとりあげているわけではないが、「不易流行」が、現代社会において教育を議論する場合のキーワードのひとつであることは推測できる。

この意味で、特に現代的な課題と関わりの深いリテラシー教育について扱う本書が、全体として「不易流行」の理念に沿った特徴を持つのは、当然のことかもしれない。しかし本書の方向性は、一般的な教育論議と大きく異なっている。本

書において収録された論考は「不易」、すなわち不変の本質を出発点としながら、その根本のところまで一体となっている「流行」を捉え直そうとする。これに対し、一般的な教育論議は、「流行」を追い求める現状への反省から「本質」を振り返るべきだとすることが多い。これは重要な相違点である。

編著者は本書の前書きで、グローバル社会の特徴が市場原理にあることに触れながら、現在の教育が「グローバル社会においてどのような人間形成や人間社会が必要なのか」といった根源的な問いが欠落してしまっているように思われてならない」(p. 1)と述べる。「どのような人間形成や人間社会が必要なのか」という「根源的な問い」、すなわち、不変の本質への問いを出発点としながら、それを「グローバル社会」という現代的な状況の中で問い直していこうとする姿勢が、ここに示されている。

「流行」ばかりを追いかける風潮への反省から「不易」の側を振り返ろうとするのではなく、「不易」の側から「流行」を問い、新たな方向性を見出そうとすること。この「不易」から「流行」へと向かう問いの方向性は、本書に収められた論文全体に通底している。この方向性をもっとも強く示されているのは、本書の巻頭に収められた編著者自身の論考であろう。「リテラシー観の変容と意味の創造」と題されたこの論考で、編著者は、「リテラシー」に対する考え方をめぐる歴史的な変容を整理した上で、この変容の背景にはコンテクストに対する捉え方の変容があると指摘する。ここでは、「コンテクスト」という「不易」なるものの視点から、リテラシー研究におけるそれぞれの時代の「流行」が整理されている。また論考の後半では、この「コンテクスト」という概念の明確な見取り図が提示される。これら、従来のリテラシー研究を「不易」なるものから整理した見取り図は、今後のリテラシー研究・リテラシー教育研究の中で重要な意味を持つと考えられる。

リテラシー研究では、1980年代以降、B. Street によって提示された「自律モデル」(autonomous model) 対「イデオロギー・モデル」(ideology model) という図式に基づいた議論が行われてきた。またそれとともに、従来の「自律モデル」とは異なるモデル、すなわち「イデオロギー・モデル」に基づく理論研究やエスノグラフィー研究が多く行われてきた。このようなリテラシー研究の動向の中で、社会的・文化的コンテクストと切り離されたものとして「リテラシー」を捉える「自律モデル」は、「イデオロギー・モデル」に立脚する研究者から、『リテラシ

ー』という概念の持つイデオロギー性に関心だ」と批判される傾向にある。また「自律モデル」対「イデオロギー・モデル」という図式を提示した B. Street 自身も「イデオロギー・モデル」に立脚しつつ、同様の批判を行っている。そのため現在、「自律モデル」に基づくリテラシー研究と「イデオロギー・モデル」に基づくリテラシー研究との間には大きな溝があるように思われる。一方で、「自律モデル」に基づくリテラシー研究が、リテラシーを社会的・文化的コンテクストから切り離されたスキルや知識と見なし、その習得がいかに行われるかを議論しつつける一方で、「イデオロギー・モデル」に基づくリテラシー研究が、学校教育におけるリテラシーのイデオロギー性を批判しつづけている。

日本語教育の文脈では、「日本語を教えること」そのものが持つイデオロギー性が問題視されるあまり日本語の学習を支援するための具体的な方法について十分な議論がなされず、結果的に、従来から行われてきている「文型積み上げ型」の教授が行われつづけていることが指摘されているが、リテラシー研究をめぐる状況もこれに類似している。「イデオロギー・モデル」に基づくリテラシー研究は、学校教育で教えられる内容としての「リテラシー」のイデオロギー性を批判しつつも、具体的な学校での教育のありかたについて十分な議論を提示しているとは言い難い。さらに言えば、「イデオロギー・モデル」に基づくリテラシー研究の知見を学習者に強制するあまり、かえって学習者自身による学びの契機が奪われる事例も報告されている。

このような状況の中で、現在、必要とされているのは、「自律モデル」対「イデオロギー・モデル」という二項対立的な図式を俯瞰的に捉え直し、さらに、具体的なリテラシー教育の方法を議論するための基盤となりうるモデルではなかるうか。リテラシー教育の議論は、今まさに、「不易」なるものへの視点を必要としているのである。本書の冒頭に収められた編著者による論考は、リテラシー教育研究におけるこのような課題に的確に答える内容となっている。

3. 本書の構成

本書には、序章に収録された前述の論文の他、関係者による31本の論考が収められている。これらの論考は、それぞれの論点に応じて四つの章に分類されている。本書の構成は以下のとおりである。

序 章

第1章 国語教育におけるリテラシー教育の構築 — 原理・目標 —

第2章 近未来のリテラシー教育 — 内容・能力 —

第3章 リテラシー教材の深みと広がり — 媒体・教材 —

第4章 リテラシー育成にむけた単元の開発 — 実践 —

第5章 リテラシーの学びへの視座 — 学習者 —

章の副題として示された「原理・目標」「内容・能力」「媒体・教材」「実践」「学習者」が、それぞれの章に収録された論考における中心的な論点である。

第1章には、理論的考察や歴史的考察によって、今後の国語教育・リテラシー教育を考察していくための原理や目標論を論じた5本の論考が収められている。また第2章では、国語教育・リテラシー教育において学習者が獲得すべき「能力」「学力」の問題を扱っている。ここでは、近年話題となっている「PISA 読解力」を視野においた論考や、諸外国のカリキュラムについての論考を中心とした9本の論考が示される。第3章では、国語教育・リテラシー教育の内容論・教材論が取り上げられている。ここでは、古典文学から映画まで、幅広いジャンルのテキストが対象となっており、リテラシー教育の射程の広さを思い知らされる。第4章に収録されているのは、リテラシー教育の実践報告である。近年提唱されている「リテラシー」という概念が新たな時代にふさわしい知識のありかたを問い直すとするものであることはすでに述べたが、ここで報告される5つの実践には、それぞれの著者が各々の専門的立場から「新しい時代に必要な知識とは何か」という問いに取り組んだ成果を見ることができる。

「教える」-「学ぶ」という二項関係で捉えれば、「教える」側に属する議論を展開する以上の章に加え、第5章では「リテラシーの学びへの視座」と題して、「学ぶ」側、すなわち学習者や「学習」という現象そのものにまなざしを向ける5本の論考が紹介されている。第5章の章題でもある「リテラシーの学びへの視座」は、本書に収められた論考全体に共通した視座でもある。その中でも特に、学習者のリテラシーの学びに焦点を当てた論考がこの章に収められている。

4. 「不易」なるもの：学習者へのまなざし

本稿で紹介者は、本書の特徴が「不易流行」という言葉によって示されると述

べた。では、本書において共通に「不易」なるものとして捉えられているものは何か。それは、学習者の学びを真摯に捉えようとする、そのまなざしであろう。近年、多く発刊されるリテラシー関係の書籍と本書とでもっとも異なるのは、本書が学習者へのまなざしに焦点を当てている点である。このことは、学習者の学びに焦点を当てた章（第5章）の存在に端的に示されている。

リテラシー教育研究における二項対立的な図式—すなわち、「自律モデル」対「イデオロギー・モデル」という図式—を乗り越え、新たなリテラシー教育研究の構想を可能にする視点とはどのようなものだろうか。この問いにはさまざまな答えが可能である。実際、いくつかの理論的視点が提案されはじめていることも事実である。しかしかたに精緻化された理論的視点が提案されようとも、それらが、学習者への視点を欠いたものであれば、結局はこれまでと同様の理論的対立が繰り返されるだけであろう。

ところで、「イデオロギー・モデル」に基づくリテラシー研究は、批判理論に基づく理論研究を展開する一方で、文化人類学・社会言語学などを理論的背景としながら、人々が実際の日常生活の中で用いるリテラシーの実践をエスノグラフィックな調査によって明らかにしてきた。また、リテラシー教育研究においても、これらの研究成果を受けたエスノグラフィックな研究が蓄積されてきている。リテラシー教育を指向するこれらの研究では、学習者が日常的に行うリテラシー実践の様相を明らかにし、これに基づいたリテラシー教育を構想しようとする。「イデオロギー・モデル」に基づくリテラシー教育研究は、このようなかたちで、学習者への視点に基づく理論構築を試みている。つまり、リテラシー教育研究は、再び、「不易」なるものとして学習者—さらに言えば、社会・文化的なコンテクストの中にいる学習者—を捉え直そうとする動向にある。本書はこのような状況にあるリテラシー教育の現状に対し、あらためて、学習者へのまなざしの重要性を説くものであると紹介者は考える。

5. おわりに

稿を終えるにあたり、再び、「リテラシーとは何か」という問いに立ち返ってみたい。

「読み書き能力」「教養があること」という本来の定義から、「新たな知識」「新たな共用」を意味する近年の定義まで、「リテラシー」という用語に共通して含ま

れているのは、「社会生活を営む上で必要な基本的能力」という意味である。どの場合においても、学習者が現在から将来にわたって社会生活を営んでいく上で必要な能力が問題とされている。

このことを考慮すれば、「リテラシー」を論ずる上で、学習者の側からの発想が提案されることは必然的なことであると紹介者は考える。まず学習者の側に立ち、学習者の視点から現在と将来の社会を見据えること、その上でリテラシー教育の本質を考えることが重要な課題となろう。この本質の捉え直しは、けして、学校で教えるべき知識内容（「学校知」）の再編成に終わるものではない。むしろ、社会生活で必要となる知識や能力＝「リテラシー」そのものを、学習者自身が構築することが主要な焦点となるべきであろう。この点において、「学習者へのまなざし」は、今後のリテラシー教育を考える上で、さらに重要性を増すものと思われる。本書の提案を踏まえ、「リテラシー」という概念が、今後、新たな学びを切り開くための鍵概念となることを期待したい。

桑原 隆編『新しい時代のリテラシー教育』

東洋館出版，2008年，4,725円